
夢で逢えたら

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢で逢えたら

【Nコード】

N1867D

【作者名】

tensuke

【あらすじ】

現実に飽き飽きしている「僕」が出逢った美青年満員電車で抱き締められて運命の人と言われてもさあどうしましようそんなこんなのお話です

1・湖（前書き）

t e n s u k e デス

新作できましたご笑納下さいませ

美青年は相変わらず玉木宏さんでイメージデス

1・湖

1・湖

引き込まれる・・・

誘われるままに　その手をとれば　僕はそのまま冷たい湖に沈む
恐い

それでも　差し伸べられる　白く美しいその手に
引き込まれるように僕は手を重ねてしまう

恐い

でも　僕はその白く美しい手の持ち主に吸い寄せられて
引き込まれる・・・

それは　碧色の水面を静かにたたえる山間の湖

湖畔には針葉樹が茂り　湖にその姿を映す

湖面に映るのは明るく青白い月明かり

そして　差し伸べられる美しく細く長く　繊細な指

僕はその指に自分の指を絡める

ああ

このまま　この手に引き込まれて

僕は冷たい湖に沈む

恐い

恐い

でも　僕はその白く美しい手の持ち主に吸い寄せられて

彼は美しい

その微笑みに吸い寄せられて

僕は冷たい白い手をとる

冷たい湖に静かに歩み入り　その水面が腰を越え　肩を越え

僕の唇が冷たい湖の水面に触れる

僕の手をひいて　彼は静かに進む

彼に連れられて 僕は冷たい水に顔を沈める
息がつまる

ごぼりと飲み込んだ水の冷たさが胸に一筋流れ込む
恐い

でも僕は その魅惑的な微笑みを見つめたまま

その手を離す事ができない

ごぼりと飲み込んだ水がもう一筋

そして僕の視界はゆらりと歪み

足は踏みしめる大地を失う

ふわり

浮き上がろうとする僕の身体は

繋がれた彼の手にひかれて湖に沈む

微笑んだ形そのままの彼の紅い唇が

僕の冷たくひえた唇にそつと重なる

それは 柔らかく冷たい唇

深く 深く 沈んでゆく

ふと見上げた頭上に 水面を透かして青白い月が見えた

それが最後に僕が見たもの

僕は静かに目を閉じた

1・湖（後書き）

お立ち寄り頂きましてありがとうございます
どうぞ感想・コメントをお願い致します
励みに作者頑張ります

2・夢

2・夢

目が覚める

いつもの朝だ

ベッドの横の窓からカーテン越しに明るい日差しが眩しい

僕はのろのろとベッドから起き上がるとカーテンを開ける

窓の外はすぐ隣のアパートの壁が迫る

そのわずかな隙間から差し込む太陽の光が視界を白くする
乱雑に積まれた洗濯済みの衣類の山から

僕は適当な服を引っ張り出すと身につける

ジーンズをひっぱりあげながら

小さなキッチンでコーヒーマーカーのスイッチをいれる

ドアの隙間に無造作に差し込まれた新聞を抜き取ると

見るともナシに一面から目を通す

三面記事にたどり着いた頃に

コーヒーマーカーから良い香りが流れてくる

コーヒーを味わいもせず流し込むと　タベ放り出したままの鞆を

つかみ

僕はスニーカーを履いて部屋を出る

ゴミ捨て場の横を通り過ぎる時に

掃除をしていた年配の女性に朝の挨拶をする

カラスが鳴いている

駅まで歩く15分の間に　自転車と一台すれ違った

後ろから白い乗用車に一台追い越された
僕はただのろのろと歩いていた

また目が覚めてしまった
こうして またいつもの一日が始まってしまった
僕はただ いつものように電車に乗る
会社へ 学校へ 人々を運んでゆく混み合った車内で
僕は耳につけたイヤホンから流れ込んでくる音楽を
上の空で聞いている

これが僕の生きている世界なのか
僕はなぜまだこの世界にいるのだろうか
毎晩のように夢に見るあの湖は
一体世界のどこにあるのだろうか
僕は早くあの湖にたどり着きたい
そして

彼の微笑みに誘われて
その白い手をとる事を望んでいる

恐いのに
それでも僕はその時を待ち望んでいる
いつか訪れると信じて
あの湖を思う

夢に続きはない
いつも同じ
そして いつも同じに目が覚める
僕の日が始まる

2・夢（後書き）

感想・コメント等頂けますと励みになります
よろしくお願い致します

3・僕

3・僕

混み合った電車の車内

毎朝乗り込む場所は同じ　そして周りの顔ぶれも同じ
名も知らぬ他人が乗り合わせる空間なのに
毎朝　同じ顔を間近にみながら　知り合う事はない
不思議な空間

僕は前から3両目の二つ目のドアから電車に乗る
そしてそのまま反対側のドアに押しつけられるように
ぎゅうぎゅうと押し込まれてくる乗客の一人になる

僕は身長が180近くある

だから　大概の場合　混み合った車内でも

いくらか新鮮な空気が吸える

そして周囲の人々の頭を見下ろし

ぼんやりと窓の外を眺めて過ごす

ぼんやりと・・・何事もなく

目的の駅までたどり着く

目的の駅では僕の押しつけられているドアが開く

しかしそれまでに通過する駅ではこのドアは開かない

僕は40分近く　このドアにぺたりとはりついて過ごす

その日　僕はいつもと違う何かに気づいて首を傾げた
何かが違う・・・でも何が？判らない

二つ目の駅で反対側のドアが閉まる頃

僕はようやくその「異変」に気づいた

僕の背後に立つ誰かが僕の肩越しにドアに手をついている
僕より長身らしいその人物からはほのかに爽やかなコロンの香りが
する

随分と大きな女性なのだろうかと首をよじった僕は
ふと合ってしまったその視線の先にあった
小さく美しいその顔からしばらく目を離せなくなってしまった

それは精悍な凛々しくも美しいハンサムな男性だった
まるで俳優かモデルのような端正な顔立ちのその男性は
年齢は僕より少し上のように 仕立ての良いスーツを着ていた
そのバランスの良いスタイルの彼がぴつたりと背後から
まるで僕を抱き込むようにして立っている

これだけ混雑した車内のこと
身体が密着するのも仕方がない
でも

それにしても 彼の立ち方はまるで恋人を混雑から守るような
自分の胸元に囲い込んで庇うような
そんな立ち方だった

僕は いつもはないほのかに守られた「空間」に違和感を覚え
ふと振り向いたのだった

僕と目のあった彼はふと柔らかに微笑んだ
綺麗な大きな二重の瞳が細められ
吸い込まれるような笑顔だった

僕は自分の頬がほのかに熱く火照るのを感じた
なんで男の笑顔にときめくんだ……

軽く目礼を落とすと僕は視線を戻した

40分間 僕は爽やかなコロンの香りに包まれて
広い胸に守られて過ごした

電車のドアが開くと 僕は転がるように外へ出た
彼は降りてこなかった

背後で閉まる扉を振り向く事ができなかった
大きなため息をひとつついた

大学にたどり着くと 掲示板に休講の張り紙を見つけ
がつくりと身体から力が抜ける

今日はアルバイトだけの一日になった

一緒に休講を喜ぶ友人もなく

僕は足を引きずって図書館へと向かう

僕はつまらない ただの大学生
狭いアパートと大学を往復し
コンビニでバイトをして過ごす

つまらない毎日
かわらない毎日
同じ毎日

そう 昨日までは そうだった

4・満員電車

4・満員電車

今朝もまた 僕はいつもの電車に乗った
そしてあのコロンの香りに身を固くした
背後から まるで抱き締められるように腕が伸びてくる
彼だ・・・

背中に彼の広い胸を感じる
肩越しにドアのガラスにつかれた彼の腕
手首に品の良い腕時計が光っている
細く長い指の手

僕はことさら それを気にしないように努め
イヤホンから流れてくる音楽に神経を注ぐ
それでも ふと電車が揺れた拍子などに
ぐいつと抱き締められるような感触に身体がぴくりとしてしまう

彼は僕より少し背が高い
僕の耳元に彼の息がかかる
首筋の産毛がさわさわと毛羽立つような感触に
僕は時折首をすくめてしまう

何なんだ・・・一体・・・
何で一体この人は野郎の後ろにこんなにぴったりと
身体を寄せて立てるんだ・・・
脂ぎったオヤジにへばりつかれる事を思えば
これは全くもって何も気にする事もない
でも

やっぱりちよつと普通じゃない

ガタンっ！

駅の手前で電車が大きく揺れた

僕だけでなく 車両に乗り合わせたほとんどの人達が

その大きな揺れに足元を危うくしてよろめいた

そして 僕はあの広い胸にしっかりと抱き止められていた

「あつ……す……すみません」

慌てて会釈をしつつ 体勢を整えようとものがく

「いや……細いね」

「えっ？」

背後の美青年は僕の身体を離さずに耳元に囁いた

驚いてその顔を見上げると

にこりと笑顔で再度ぎゅつと抱き締められた

「……？……」

僕の脳裏には果てしない疑問符が浮かんでいた

電車が停止し 扉が開くと同時に僕は彼の胸から解放された

「気をつけてね」

「……へ……」

およそ大の男にかけられる言葉とも思えない台詞が

僕にむかつて投げかけられた事と

さらには それを放った相手のまばゆい程の美しい笑顔に

僕は呆然と立ち尽くし 閉まるドアとホームを離れてゆく電車を
ただ見送っていた

「何なんだ……一体」

4・満員電車（後書き）

感想・コメント等頂けますと
励みになります
よろしくお願い致します

5・気づいた事

5・気づいた事

そうか・・・彼だ

今頃気がつくなんて 僕も相当どんくさい・・・

いや それ程に 現実の彼はあまりにも爽やかで健康的な

美丈夫な美青年でサラリーマンの姿で

僕は彼のあの笑顔がどこかで見たことのある顔だと思いつつも
どうしても思い出せなかったのだ

どこかで見た俳優かタレントの誰かに似ているのかとも思った
でもそうじゃなかった

彼は 電車で出会う彼こそ

あの毎晩のように夢で出会う 湖の彼だった

夢の中の彼は 儚げで白く透き通るような姿で

ただ笑顔だけが印象的な まるで湖の精か何かのようだから

そっくりなその顔が 満員電車の中に現れても

僕にはすぐには気づけなかったのだ

何故・・・夢の彼にそっくりな人が実在するんだろう

何故 その彼は毎朝僕の背後に立ち

僕を抱き締めるのだろうか

今朝はベッドに起き上がると同時に気づいたこの事実で

僕はいつもより少しだけ行動開始が遅くなった

そして どうせ大学の授業なんて遅れていつでも大差ない

ヘタをすれば真面目に行っても休講だったりする

そんな開き直りで 僕はいつもより随分とゆっくりと部屋を出た

当然　いつもの電車には乗り遅れ

今朝はあの爽やかなコロンの彼には会わないのだと

そう思つて乗り込んだ電車の中

僕は　いつもとかわらぬ香りに包まれた

「・・・えっ・・・」

振り向くより早く　僕の身体はふわりと背後から優しく誰かに抱き
込まれた

満員電車の身動きひとつできない中

僕の耳元に甘い声が囁いた

「今朝は寝坊でもしたの？」

「・・・えっ・・・」

声はほのかな笑いを含み　答えを期待はしていない様子だった

そして　いつにも増して　はつきりとそうと判る程に

僕は背後からしっかりと抱き締められていた

窓ガラスに映る僕の顔

困惑しきつた自分の顔　それは眉間に深い皺を刻み

きつくも見える大きな目をしかめ

大きな口をへの字に結び

無造作な前髪が額にかかっている

その後ろには端正な顔立ちの優しい笑顔

何かがおかしい・・・

僕が可愛い女の子ならともかく

何故　僕なんだ????

彼は一体　何なんだ????

それに

どうして　僕は彼の夢をずっと見ていたんだろう

そう思った途端　また耳元に甘い声が囁いた

「まだ・・・湖に行きたい？」

「・・・！・・・」

そして　こりっ　と甘く耳朶を囓られた

「・・・ひっ・・・」

あの湖の白い彼が　この僕の後ろにいる彼？？

彼は一体

なんなんだ・・・

6・彼の事

6・彼の事

「今日是一緒に降ります」

そう小さく囁くと 彼は僕を背後からさりげなく支え
まるで淑女をエスコートする紳士の如く
大学の最寄り駅で電車を降りた

「あの……」

「はい？」

「あの……」

「はい」

「あのっ！ 貴方 一体何なんですか？ 毎朝毎朝僕の後ろに……」
「はい 貴方を捜していましたから」
彼はとろけるような笑顔でそう言った

こうして向き合ってまじまじと眺めれば
いよいよこの人はスタイルも顔立ちも申し分がない
質の良い生地のスーツをすらりと着こなして
姿勢良く立つ姿は凛々しく逞しくもある

広い胸板を思わせるスーツ姿の上には
やや不釣り合いにも思えるような

淡い微笑みが上品な優しげな美しい顔が乗っている
少しだけ日本人離れた雰囲気

いや……どこか人間離れた 浮き世のものらしからぬ
美しさと思議に妖艶ともいえる雰囲気纏っている

「あの……そういう事じゃなくて 一体何者なんですか？

僕に何のかかわりがあるっていうんです？何の用が・・・」

「デimosの花嫁っていう漫画をご存じですか？」

「はっ？」

「いや 失礼 少女漫画ですからね 貴方はご存じないかな」

「はあっ？」

「私は 悪魔 です」

「・・・・・・」

僕は くるりと背を向けると 彼を置き去りにして歩き出した

季節の変わり目に現れる変な人なんだ・・・

可哀想に あんなに綺麗なのに

どこかの施設から逃げ出してきたのだろうか・・・

気の毒に・・・

僕は 大学のキャンパスにたどり着くまで振り向かず

ただ黙々と歩き続けた

夢で見たあの彼にそっくりだったから

ちよつと気を許してしまったんだ

単なる偶然だったのに

僕もちよつと変だった

反省反省

妙なヒトにかかわってはいけない・・・

僕はいつも通りに授業を受け

いつも通りにバイトに行き

いつも通りに夜遅く 部屋へと戻った

そして バイト先のコンビニでもらってきた弁当を食べ

シャワーを浴びて ベッドに潜り込んだ

明日からは車両を変えて電車に乗ろう

眠りにつく手前でそんな事を考えた
この日 僕はいつもと違う夢を見た

7・違う夢

7・違う夢

いつもの湖にいた
でも彼の姿がない

見回すと 湖畔を回り込んだあたりに彼が佇んでいるのが見えた
僕は静かに湖畔を歩いて彼のそばへと近づいた
彼は湖を見つめていた

僕は初めて彼に声をかけた
「どうしたの？」

彼はふとその面をあげると 儚げなあの美しい笑顔を見せた
そして僕の方へとあの白い手を差し伸べて
静かにこういった

「どうして 今日私の前から逃げてしまったの？」
「・・・・・・・・へっ・・・・・・・・」

その声は あの満員電車の中で聞いたあの美青年のそれだった
ああ・・・

夢まで混乱してるんだ
僕は夢の中でそう思った
いつもの夢が好きだったのに
あの湖に沈み込んで
二度と目を覚ましくないと願う夢が好きだったのに

「君を捜してようやく見つけたのに 君は私から逃げてしまう」
「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「私は君を捜していたのに 君も待っていてくれると信じていたの

に」

「・・・僕・・・？」

「君の手をとってこの湖に共に願っているのに」

「貴方は・・・貴方は・・・誰？」

「私は君を愛する悪魔^{デイモス}」

「・・・デイモス・・・」

「黄泉の国の王デイモス 君はその花嫁」

「・・・は・・・はなよめ・・・」

「私の手をとるがいい 共に行こう さあ」

白い美しい手が差し伸べられる

引き込まれる

怖い

でも 行きたいと願ってしまう

でも・・・花嫁って何だ・・・

僕は・・・僕は男なのに???

「さあ・・・」

白い手を差し伸べられて その手に触れる・・・
そう思った時 僕は眩しい光で目を覚ました

7・違う夢（後書き）

お立ち寄り頂きましてありがとうございます
感想・コメント等頂けますと励みになります
よろしく願いいたします

8・前世の花嫁

8・前世の花嫁

僕はぼんやりとベッドの上に座り込んでいた

目が覚めてしばらくそのままに

今日は土曜日 学校は休みだ

昼過ぎからバイトに出ればいい

だから 朝の電車には乗らない

彼にも会わなくて済む

妙な夢を見た

いつもと同じようで違う夢

そして 混乱した「彼」と「デイモス」と名乗るあの美青年

僕の潜在意識が見せる夢だとしたら

僕はどうかやら随分と倒錯した性格の持ち主らしい

自分が「花嫁」と呼ばれる夢を見るなんて……

僕はのろのろとベッドから起き出すと

コーヒーマーカーのスイッチを入れた

コーヒーをすすりながら 尚も夢の事を考えていた

ぼんやりと本屋に寄って「悪魔の花嫁」なる漫画を捜してみようか
そんな事まで考えていた

あの妙な美青年がとても気になった

とても頭のおかしな人には見えなかったつけ……

でも どう考えてもどこかおかしい……

僕はつらつらと考え事をしながら支度を整えると

バイトにむかうべく部屋を出た

電車は平日と違い 乗り込む人の数も少なく
車内は座れないまでもかなり余裕の空間がある程に空いていた
僕はいつもの習慣で 乗り込んだドアと反対側のドアにもたれて立
った

電車がホームを離れてしばらくすると

ふと背後に人の気配を感じ 僕は振り向いた

「やあ！」

そこには爽やかな笑顔の彼がいた

「あ……」

僕は思わず身を固くした

そんな僕にはお構いなしに彼はにこやかに話しかけてきた

「私の事を思い出してくれましたか？」

「……」

無言で見返す僕に 彼は笑顔のまま続けた

「離ればなれになって4百年です ようやく見つけました」

「よ……よんひやくねん……」

「ええ……貴方を連れて帰りたいのです」

「……あの……人違いでは？」

「間違いありません」

「はあ……」

につこりと微笑む美青年の前に

僕は続ける言葉を見つけれなかった

「夢で 夢でずっと貴方を捜していました」

「夢……」

「あの湖に私たちの戻るべき所があります」

「戻るべきところ？」

「はい 私は貴方を迎えに来たのですから」
「迎えに……悪魔……が……?？」
「ええ」

ニツコリと艶然と微笑む自称悪魔の美青年
僕はくらくらと目眩がするのを感じた

9・悪魔という名の青年

9・悪魔という名の青年

「これがデイモスの花嫁という漫画ですよ」

うれしそうに うきうきとした手つきで僕に一冊の単行本を手渡す

電車を降りてからも僕の側を離れずついてきた

自称「悪魔」の美青年は 僕を駅前の本屋へと引つ張っていくとこの「悪魔の花嫁」という少女漫画の立ち読みを強制する

一読したところ

悪魔が自分との許されぬ恋の戒めに黄泉の国につながれた恋人とそっくりな人間の娘の身体を

今にも朽ち果てようとしている恋人の新たな魂の入れ物として使わんと

身代わりの花嫁としてその娘を連れ去ろうとする

しかし そうこうするうちにその人間の娘に恋をしてしまい自分を待っている恋人との間で苦しむ とか何とかいうお話……

で……何故 僕が花嫁？

その素朴な疑問をぶつけると 彼はにこにこ笑顔で答えた

「前世で私たちは愛し合う恋人同士でした

結婚を誓い合っていたのに引き裂かれてしまいました

私は貴方を捜し続けていました

貴方は今の時代に生まれて たまたま男性の身体ですごしていますでも その魂は私の愛した花嫁のものです」

「はぁ……」

「貴方は既に思い出しているハズです

毎夜 夢で私たちは出逢っていたのですから」

「夢・・・ね」

「ええ」

僕のバイト先にまで 彼はくつついてきて店長にまで挨拶をした
さすがに「悪魔です」とは言わなかったが

にこにことまるで僕の兄貴のような顔で

いつもお世話になっておりますとスマートな挨拶をした

店長もかしこまって こちらこそとしゃっちょこばって挨拶し

はてには 僕に今日はいいから帰りなさいとまで言った

まるで生き別れの兄貴が田舎からはるばる訪ねてでも来たみたいに
せつかなんだから 今日はずっくりしなさいなんて言われた

僕は貴重なバイトをキャンセルされて

本音を言えばかなり経済的ショックが大きかった

それでも 自称悪魔の美青年はにこにこと

心底うれしそうに こそつと僕の耳に囁いた

「よかった これで今日はゆっくり一緒にいられますね」

在る意味 本当に悪魔だと思った

彼は 僕がスーパーマーケットで夕食の買い物をする時も

にこにことカゴを持って横を当然な顔をしてくつついてきた

そして 僕のアパートの部屋までやってきた

彼は見事な包丁さばきで買ってきた食材で見事な料理を作ってくれた
狭い部屋の小さな座卓に見たこともないような

豪華な晩飯が並んだ

「・・・いただきます・・・」

僕は自称悪魔の美青年と向かい合って座り

晩飯をかき込んだ

料理はどれもとびきりに美味かった

彼は食器の後片付けも実に見事にやってのけた

あつという間に食後のコーヒーまで出され

僕は自分の部屋でまるで客のようにしゃっちょこばって座り込んでいた

「足を崩したらどうですか？えっと今の名前は何ですか？」

「な・・・名前 すかい 青井須貝」

「スカイ いい名前ですね」

「あ・・・あなたはなんて呼んだらいいんだ・・・悪魔か？」

「いえ ひいす 緋素です 田村緋素」

「・・・妙な名前だね」

「便宜上ですから」

「便宜上ね・・・」

「で スカイ 私のこと思い出してくれましたか？」

「無理いわないでよ 突然現れて男に花嫁呼ばわりされちゃ敵わないよ」

「無理ありませんね でも私たちは愛し合っていました
今に思い出します 魂の記憶は永遠ですから」

「魂だったって・・・僕は今男ですから・・・緋素さんだって男性
でしょ？」

「何か問題でも？」

「・・・・・・はあ؟؟??」

にこにこ正座している美青年に返す言葉が見つからない

僕は黙ってコーヒーを飲んだ

同じコーヒーメーカーで同じ粉なのに 毎朝飲むより美味かった

なんだか腹が立つ・・・

いそいそと押し入れから布団を取り出すと 緋素は僕に向き合って言った

「お風呂沸かして一緒に入りましょう！」

「・・・へっ・・・」

やっぱり悪魔だ いや悪夢だ ありえない

僕は頭をぶんぶん横に振って答えた

「入りたかったら どうぞご自由に お一人でどうぞ」

「そうですか？スカイの背中流してあげますよ」

「結構です」

「では お先に」

勝手知ったるなんとかよろしく

緋素は浴室へと消えていった

しばらくすると 脱衣所から緋素の声がした

「何でもいいので スカイの服を貸してもらえませんかあゝ？」

だよな・・・勝手にくつついてきたんだから何も持っていないよな

仕方なく 僕は手持ちの服の中から幾分大きめのスウェットの上下とボクサーショーツを一枚選ぶと脱衣場のドアの隙間から放り込んだ

「ありがとうございます」

丁寧な柔らかな耳に心地よい声が聞こえてくる

何だかんだ言って 僕は彼がそばにいる事がイヤじゃない

今になって気がついた

彼の全てが心地よい

その姿も見とれる程に格好良くてキレイだし

その声は低く甘く耳に心地よい

そして その広い胸に抱き締められた感触が僕の脳裏に蘇る

あ・・・

倒錯してる

僕は赤らむ頬に困惑した

やっぱり 本当に僕の魂とやらは彼に恋した魂なのだろうか・・・
だから毎晩のようにあの湖と彼の夢を見ていたのだろうか・・・

そんな事を思っていたら 目の前の脱衣所のドアが開いて
濡れ髪をタオルで拭きながら緋素が出てきた

その姿は無防備で スーツ姿の時よりは若々しく幼く見え
固めていない前髪がさらりと額にかかる様がどこか艶っぽい
「スカイも入るといいですよ すっきりする」

「は・・・はい」

自分の家なのに なんでもそ者のこいつの方がくつろいで
エラソウな口をきいているんだ

そんな悪態も脳裏をかすめたが さして気にもならなかった

それ程 僕はこの美しい青年が目の前にいる事がイヤじゃなかった
むしろ好ましいと思える程に その笑顔が心地よかった

風呂につかりながら 頭の中ではとりとめもなく

そして結論もでないままにぐるぐると 自称悪魔の美青年と
自分の事を考えていた

この後 一体何がまっているのだろうか???

10・初夜

10・初夜

「スカイ こっちにおいでよ どうしてそんな隅っこにいるの？」

「いや・・・僕は ここでいいですから お気遣いなく」

「どうして？ここはスカイの家なのに」

「いや・・・僕は ここでいいですから お気遣いなく」

狭い部屋の中 敷かれた布団は一对

その布団をめぐって悪魔が手招きしている

一緒に寝ろというのか

ありえない

僕は部屋の隅っこにクッションを抱えてフリースにくるまったら

「風邪をひきますよスカイ 布団を使って下さい

そんなに私と一緒にイヤなら私がそのクッションで寝ますから」

悪魔は実にスマートで紳士的な申し出をしたりする

すると途端に 僕は自分がとんでもなくわがままな

頑ななイヤな奴のように思われてくる

自分が意地を張って 客人にイヤな思いをさせているような・・・

いや

そもそも こいつは客じゃない

勝手にくつついてきたんだ

押しかけてきたんだ

だから 僕は何も悪くない

そう思い直してみるものの

綺麗な顔に心底心配そうな表情を浮かべて
僕を見つめている悪魔を見るとココロが痛む
やっぱりコイツは悪魔なんだ……

「緋素さん……男と一緒に寝るの イヤじゃないんですか？」
とりあえず素朴な疑問を投げかけてみる

「スカイは私の花嫁ですから 何を嫌がる事がありますか」
「はあ……」

「あ……スカイは初めてですか？もしかして」

「はっ？何が初めてですと？？」

「女性と一夜を共にした事はありませんか？」

「はあっ？なぜに貴方を相手にそんな事を告白しなくてはいけない
のでしょうか？」

「いえ 怖がっているようでしたから」

「そもその出だしが間違っていると思いますが……」

「そうですか 初めてですか」

「いや そうじゃなくて」

「大丈夫 優しくしますから」

「だから そうじゃなくてっ！！！」

やっぱりコイツは悪魔だ 僕をどうしようというんだ……

大体 ほんの3日程前に初めて顔を見た奴が

どうして今こうしてちゃっかり部屋で布団にもぐりこんで僕に手招
きをしているんだ？

この状況がどうにも理解できない

「あの……緋素さん……僕が花嫁というところがどうしても理
解できないのですが……」

「お話ししよう」

私とスカイさんは400年前 フィンランドの田舎町で出会いました
綺麗な湖のある街でした 二人は恋におちました でも家族が二人
の結婚を許しませんでした

そして私たちは湖に身を沈めたのです」

「・・・し・・・心中ですか・・・」

「死んで二人共にいられると そう信じていました でも神様はそ
んな勝手な愛は

許しては下さいませんでした 残された者の悲しみを思えば当然の
報いでしょう

私たちは引き裂かれ 私は黄泉の国へと落とされました 貴方の魂
は生まれ変わりを繰り返し

私はそれを探し続けました そしてようやく今 スカイさん貴方を
見つけたのです」

「ど・・・どうして僕の魂は生まれ変われて 貴方は悪魔にされてし
まったんですか？」

「それは 私の想いの方が深く 貴方を引き込んだのが私だったか
らです」

「引き込んだ・・・」

緋素の瞳が哀しげに曇り その白く美しい顔が俯いてしまった

僕は思わず躍り寄ると 緋素の白い手に自分の手を重ねていた

その感触は 何度も夢に見た あの湖の精と思っていた彼のそれだ
った

やっぱり

緋素の言うように 僕は本当に彼と恋に落ちた相手の生まれ変わり
なのだろうか・・・

彼の手を両手で包み込みながら 僕はぼんやりとそんな事を考えて
いた

ふと もう片方の彼の手が 僕の顎にかかり

僕の顔をほんの少し上に向けた

「え？」

次の瞬間 目の前に迫る緋素の紅い柔らかそうな唇を間近に見て僕は彼を押しつけるかわりに 瞳を閉じた

優しく 柔らかい感触が唇に重なる

それはどこか懐かしく 夢とは違って暖かい唇だった

「んっ・・・」

口づけは何度も啄むように軽く繰り返され

僕はなぜか知らずそれがもどかしくさえ思われて

幾度か目に繰り返された羽のような軽い口づけに自分から深く吸い付いた

「スカイ・・・」

耳元に響く甘い囁き

優しく差し込まれた舌の甘い動きに誘われて

僕はおずおずと自分の舌を差し出す

絡まる舌の隙間から溢れた唾液が顎へと流れる

緋素の唇がそれを追って 僕の顎から首筋へと這ってゆく

そのまま 僕は静かに布団に押し倒された

僕は抵抗しなかった

身体中の力が抜けてしまつて 為す術もなかった

緋素の白い手が僕のスウェットをまくりあげ

その唇が胸元へと滑ってゆく

僕は 初めての体験に軽い目眩に掠われていた

11・初体験

11・初体験

自分の胸にある小さな突起が　こんな風にざわざわとした快感をもたらす場所だったなんて

僕は今の今まで知らなかった

緋素の柔らかな唇が　ささやかな突起に口づけて

優しく甘く歯を立てる

やわらかく吸い上げられて　それはぷっくりと赤く染まって立ち上がる

「小さくて可愛い・・・毎日こうしていると大きくなって触れやすくなります」

「なっ・・・」　思わず赤面する

そんな僕にはおかまいなしに　緋素は僕の胸元を愛撫し続ける
じんわりと身体が熱くなる

下腹部に集まる熱に自分でも戸惑ってしまう

相手は男なのに・・・

緋素の唇はみぞおちをすべり　やんわりと頭をもたげはじめた

僕の昂ぶりをスウェット越しにその形をなぞる

「はっ・・・あん・・・」

僕の口から思いも寄らない甘い吐息混じりの声が漏れてしまう

「スカイ　可愛い声」

緋素の低音は甘く尾てい骨に響く

下着ごとスウェットパンツをするりと下げられて

僕の昂ぶりが露わになる

ひんやりとした外気にさらされて　熱を帯びたそこは小さく震える

大きく口を開き 僕の昂ぶりを含むと 緋素はやさしく吸い上げる
「いやっ・・・あ・・・」

された事もない愛撫に僕は腰が跳ね上がるのを止められない
それ程に 緋素のそこへの口づけは刺激的で

僕は目の前が真っ白になる

緋素は達してしまった僕の飛沫を飲み下すと

優しく僕を抱き締めた

僕は全身の力が抜けてしまい ただぐつたりと彼の胸に顔を埋める

再び重ねられた唇の その感触に夢中になる

ああ キスがこんなに心地よいものだなんて

こんなにも刺激的で 甘くて 官能的なものだったなんて

僕は深く口づけられるうちに再び自身が熱く芯をおびてくるのを感じた

僕に覆い被さるように口づけを繰り返す緋素のそれもまた

薄いスウェット越しにはつきりと判るほどに固く昂ぶり

密着した下半身で欲望の隆起は刺激的に擦れ合い 僕は腰が揺れるのを止められない

直接触れられていないのに

そうであれば在るほどにもどかしくも熱くなってしまう

こんなの初めてだ・・・

溶けてしまう

身体中が熱く溶け出してゆく

「ひ・・・緋素・・・」

僕は夢中で彼の名前を呼んでいた

彼はもどかしげにスウェットを脱ぎ捨てると僕の両足を抱え込んだ

唐突に突き上げられた衝撃に

僕は目から火花が散った

溶けていた身体が現実に取り戻されて 二つに引き裂かれた

最奥まで突き上げられて

僕の瞳からは涙が溢れた

ひどいや・・・いてえよ・・・あんまりだ・・・

もう少しましなやり方はねえのかよ・・・

僕は思わず悪態をついた

それは声にもならず ただ悲鳴にも似た喘ぎ声になった

自分が緋素のそれをくわえ込み収めたのだと判ると

それは痛みを越えて 何か満ち足りた気分になった

ひとつに繋がれた二人の身体

きつと 前世にとげられなかった思いなのかもしれないな

そんな事をふと思った

なぜなら

僕を抱き締めている 緋素の瞳から一筋の涙が零れたから

僕は彼の涙を唇ですくい取った

僕の唇は 身体を重ねたまま 深く彼の口づけに攫われた

12・そして湖へ

12・そして湖へ

「だって また湖に身投げなんかしたら同じ事の繰り返しじゃん」
僕はフィンランドのあの湖へ共に行つて欲しいという緋素に言った

「今度は違います 神様は私にチャンスを与えて下さった
四百年かけてスカイを捜したのは 今度こそ 二人で生まれ変われる
ためです」

「二人で生まれ変わる・・・」

「そうです 今度こそ 祝福される二人として生まれ変わるので
「そんなことが・・・そんなことができるの？」

「ええ・・・神様の約束ですから」

「生まれ変わる・・・」

僕は早くに両親を事故で亡くした

兄弟もいない

親戚の家をたらい回しにされて育った

奨学金をもらつて入った大学でも友人は数える程しかない
何の未練もない人生だ

背が高くて格好いいとか

個性的で魅力的な顔立ちだとか

女生徒たちから騒がれても自分には何の感動もなかった

女性との経験がなかったワケでもない

恋愛も人並みにはしてきた

それでも

死ぬほど愛した思いもない

今 肌を重ねた緋素にこんなにも惹かれる自分は
やはり本当に四百年の年月を越えて探し当てられた魂なのだろうか・

ふと

このまま 彼についていってしまいたいと
そう思っている自分に気がついて呆然とした
そう

僕には僕を惜しんで悲しんでくれる人はいない
今 僕を求めてこんなにも求めてくれる彼に身を任せてもいいじゃないか

僕は心を決めた

彼についてゆこう

そして二人で生まれ変わる

今度こそ 祝福される恋人同士として口づけをかわそう

僕はどんな可憐な少女に生まれ変わるのだろうか
そんなことを思った

「一緒に行くよ 緋素」

「ありがとうスカイ 愛してます」

「たぶん僕も・・・」

僕らはごく普通に観光客が旅行で訪れるように

ごく普通の手順と手続きを経て

晴れてフィンランドの地へと降り立った

緋素は片時も繋いだ僕の手を離そうとしなかった

男二人が手をつなぎ歩いていれば

それもかなりの長身で目立つ風貌の二人となれば人目をひく

でも気にはならなかった

きつと 生まれ変われば 僕は可憐な花嫁として

緋素の腕に自分の腕を絡めて歩くだろう

それもいい

僕は今の自分に未練もない

幾たびも繰り返し見た夢の湖が今目の前にあった

緋素に連れられて訪れたそこは

まさに夢の中の景色そのものだった

「綺麗な所だね・・・夢ではいつも夜で月明かりだったから
少し寂しげな景色に見えてたんだ・・・」

「スカイ・・・それは魂の記憶です 私のスカイ」

「ねえ・・・四百年前の僕は何という名前だったの？」

「スカーレットです」

「スカーレット・・・」

「カイル・スカーレット そういう名前でした」

「見た目は？」

「今のスカイにそっくりな 大きな黒い瞳が魅力的なヒトでした」

「そう・・・僕が夢に見た緋素は今と同じ姿だったよ」

「ええ・・・私は変わりませんでした 戒めのためです」

「そう・・・」

「出会えてヨカッタ」

「うん・・・僕も今はそう思ってるよ」

「一緒に」

「一緒に行くよ」

「スカイ 愛しています 今も これからも 永遠に」

僕は彼の差し出した手に自分の手を重ねる

恐い

でも 僕はその白く美しい手の持ち主に吸い寄せられて
引き込まれる……

それは 碧色の水面を静かにたたえる山間の湖

湖畔には針葉樹が茂り 湖にその姿を映す

湖面に映るのは明るく青白い月明かりではなくまばゆい昼の光り

差し伸べられる美しく細く長く 繊細な指

僕はその指に自分の指を絡める

ああ

このまま この手に引き込まれて

僕は冷たい湖に沈む

恐い

恐い

でも 僕はその白く美しい手の持ち主に吸い寄せられて

彼は美しい

その微笑みに吸い寄せられて

僕は冷たい白い手をとる

冷たい湖に静かに歩み入り その水面が腰を越え 肩を越え

僕の唇が冷たい湖の水面に触れる

僕の手をひいて 彼は静かに進む

彼に連れられて 僕は冷たい水に顔を沈める

息がつまる

ごぼりと飲み込んだ水の冷たさが胸に一筋流れ込む

恐い

でも僕は その魅惑的な微笑みを見つめたまま

その手を離す事ができない

ごぼりと飲み込んだ水がもう一筋

そして僕の視界はゆらりと歪み

足は踏みしめる大地を失う

ふわり

浮き上がろうとする僕の身体は
繋がれた彼の手にひかれて湖に沈む
微笑んだ形そのままの彼の紅い唇が
僕の冷たくひえた唇にそつと重なる
それは 柔らかく暖かい唇
深く 深く 沈んでゆく

最後に見上げた水面の裏側
それはキラキラとした日差しの虹だった

13・そして

13・そして

目覚めた時　そこはまばゆい光に包まれて
眩しすぎて目が開けられない

手探りで辺りをさぐる

暖かいものに手が触れる
手だ

「緋素・・・ひいす・・・」呼んでみる
触れた手がそつと握りかえしてきた
ああよかった・・・彼がそこにいる

「スカイ？」

今の名前は知らない　でも前はそんな名前だった
辺りの明るさに目が慣れてきた

手探りでお互いの姿をさぐっていた二人は
ようやくその瞳にお互いの姿を映した

そこはあの湖の畔

優しい手が髪についた落ち葉をはらってくれた

「緋素・・・よかった　かわってないよ・・・」

「スカイも　よかった」

「え・・・」

「昔のままです」

自分の姿を見下ろして絶句した
ジーンズに包まれた長い脚が見えた

探った髪は短くて

恐る恐る覗き込んだ湖の水面に映った自分の姿

それは 可憐な少女のそれではなく

見慣れたあの 青井スカイ そのものだった

「……男の……野郎のままじゃん……」

絶句する僕をよそ目に 緋素はうきうきと自分の身体を撫で回している

「生まれ変わりました！人間です もう悪魔じゃない」

僕にはその違いがちっとも判らなかった

でも

本人がそう言うのだからそうなのだろう……

「ねえ……また花嫁になれないけど……」

「え？スカイは カイルは元々男性でしたよ」

「はっ？」

緋素は僕を抱き締めると熱い口づけをしてくれた

そんなもんか……

それでもいいか

愛されて生きられるなら それはシアワセというものだ

僕たちは 四百年越しの恋を実らせた

めでたし めでたし

13・そして（後書き）

お付き合い頂きましてありがとうございました
ご感想・コメント等頂けますと今後の励みになります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1867d/>

夢で逢えたら

2010年10月10日13時59分発行